

# 音楽科の教材研究における指導内容導出の視点に関する一考察

——《威風堂々第1番》を教材として——

鉄 口 真理子・大 和 賛

(キーワード：音楽科，教材研究，指導内容導出，教科内容)

## I 問題の所在と目的

### 1. 問題の所在

教材研究とは、その教材を通して学習者に習得させようとする学問的な「教科内容」との関係においてその教材そのものの適否をも検討することも含むものとされる<sup>1)</sup>。『現代カリキュラム事典』において柴田(2001)は、本来教材研究とは、「教材づくりから授業づくりに至るまで、教材について行われる一連の研究活動全体を指す<sup>2)</sup>」と述べている。そして、我が国の教材研究は、戦前に形成された教科書絶対主義の影響などから、教科書そのものを教えるという教科内容と教科書の同一視が未だに根強く、「教科書に与えられた教材をどのようにかみ砕いて子どもに教えるか」という指導法の研究が主となり、教材そのものの教育的価値や善悪は問わないという現状が指摘されている。柴田によると、教授—学習過程の中で教材が果たす機能を明らかにすることが教材研究の基本的課題とされる。その機能とは、①教授内容の選択、②学習課題の提示、③学習内容の教示、定着、④子どもの診断的評価という4つが示されている。同事典の発刊から20年以上が経過しているが、近年の音楽科の実践をみると、新たな教材開発の試みは為されつつあるが、教授—学習過程の中で教材が果たす機能にまで言及したものは管見の限り見当たらない<sup>3)</sup>。

教材とは何かに目を向けると、子どもが学ぶべき内容、すなわち「教科内容」と学習者の認識を関係づける概念を指し、学習者は教材を通して「教科内容」に関する認識を形成するとされる<sup>4)</sup>。そして、教育実践レベルの「教科内容」として「指導内容」という用語がある。『音楽教育実践学事典』によると、音楽科の指導内容とは「教師が授業において子どもに獲得させるべきと考える内容。教科内容を単元・題材、授業レベルで具体化したもの<sup>5)</sup>」と定義されている。このことから、教材に関する学習者の認識を形成するものとしての「指導内容」を見出すことが教材研究の第一歩となると解釈できる。以上、教材本来の意味と教材の定義から考えると、教材研究とは、学習者が教科内容に関する認識に即した指導内容の選択、およびその提示方法や定着等の機能を、教育実践を通して明らかにする一連の研究活動全体と解釈できる。これを本研究における教材研究と定義する。

近年の音楽科の教材研究に関する研究は数少ないが、理論的根拠に基づき、教材の意味を見出そうとするもの<sup>6)</sup>、対象となる児童の活動を想定して教材研究を行おうとするもの<sup>7)</sup>が見受けられる。しかし、教科内容を意識したもの、すなわち、授業レベルでの「指導内容」を意識した教材研究が読み取れるものは、管見の限り、斉藤・小笠原・山口(2010)<sup>8)</sup>、小川(2015)<sup>9)</sup>のみであった。これらの研究では、「生成の原理」に基づいて教材研究がなされている。生成の原理とは芸術を日常経験の発展とみるJ.デューイの芸術的経験論に基づいて導出された芸術教育の原理である<sup>10)</sup>。生成の原理に基づく教科内容とは、i 音楽の形式的側面(音楽の諸要素とその組織化)、ii 音楽の内容的側面(音楽の質、曲想・特質・雰囲気)、iii 音楽の文化的側面(風土・文化・歴史)、iv 音楽の技能的側面(表現の技能、鑑賞の技能「批評」)という4つの側面で捉えられている。斉藤ら、小川の研究から、教材研究において教材から指導内容として「速度の変化」「反復と変化」「後打ちのリズム」といった音楽の形式的側面をいかに導出したか、その手続きが読み取れる。本研究は、この生成の原理に依拠して教材研究を進めることとする。理由は、この原理が音楽科の教科内容を導出する原理、さらには学習方法の原理とされる<sup>11)</sup>ことから、芸術教育としての音楽科において教材づくりから授業づくりに至るまでの一連の活動として教材研究を行うことができる考えたためである。

一方、平成20年改訂の小学校及び中学校学習指導要領において〔共通事項〕が新設され、現行の平成29年版に引き継がれている。この〔共通事項〕の新設によって、旧来の知識・技能の伝達を主とする学習から脱し、生涯にわたって子ども自身が能動的に音の世界にかかわっていけるような音楽的な思考力を育てる学習を実現するこ

とが可能となった。〔共通事項〕は音色、リズム、強弱、速度といった音楽の構成要素と、反復と変化、呼びかけと答え、形式といった音楽を構成する原理が含まれ、これらを知覚・感受することとされている。子ども自身が知覚・感受すると、それまで無意識だった音の世界を意識する窓口を得ることとなり、思考力を働かせることが可能になる。この〔共通事項〕は生成の原理に基づく教科内容からみると、i 音楽の形式的側面、ii 音楽の内容的側面に当たると解釈される。さらに、「自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連づけること（中学校）」が、音楽的な見方・考えたとされていることから、i 音楽の形式的側面、ii 音楽の内容的側面に加えて、iii 音楽の文化的側面とが関連し合いながら音楽的な見方・考え方を働かせることになるものと解釈できる。このことから、生成の原理に基づいて教材研究を検討することで、学習指導要領でいわれる音楽的な見方・考え方を働かせ、子ども自身が教科内容に関する認識を形成する姿を明らかにすることができる。以上より、音楽科、教材研究、指導内容導出の視点、教科内容をテーマとして研究を進めることとした。

## 2. 研究の目的と方法

本研究の目的は《威風堂々第1番》を教材とし、音楽科の教材研究における指導内容導出の視点について考察することである。指導内容導出の視点に関する研究は未だ数少ないことから、今回は先行研究等を手がかりとして、実践前の教材研究に関する実際の作業について考察することで今後の実践研究の示唆を得たい。

研究の方法は、文献および先行研究から、生成の原理に基づく教材研究における指導内容導出の視点について整理する。その視点に沿って小学校第5学年を想定した《威風堂々第1番》鑑賞の教材研究の手続きを捉え直す。最後に生成の原理に基づく教材研究における指導内容導出の意義という観点から考察する。なお、この《威風堂々第1番》の教材研究は、筆者が企画を担当する日本学校音楽教育実践学会課題研究「『生成の原理』に基づく音楽科授業における教科内容の体系—その1 生成の原理に基づく音楽科の教科内容—」(第27回全国大会、2022年8月20日)を明らかにすることを目的として、A市B小学校5年生を対象に2022年6月21・23・28日に大和によって実践されたものである。今回は指導内容導出の視点という新たな観点から実践前に行った教材研究を捉え直すところに本研究の独自性がある。執筆はⅠ、Ⅱ、Ⅲ(1)(2)③、Ⅳは鉄口が担当、実践対象となる子どもの実態をふまえたⅢ(2)①②は実践者である大和が担当した。

## Ⅱ 生成の原理に基づく教材研究における指導内容導出の視点

ここでは、『音楽教育実践学事典』及び先行研究において言及されている指導内容導出の視点について整理する。

### 1. 授業構成における教材研究の視点

衛藤（2017）によると、授業構成における教材研究の視点として次の3点が挙げられている<sup>12)</sup>。

- ①素材は子どもの経験とどのような接点をもっているか
- ②この素材を通して子どもの現在の経験にどのような意味を付加することが可能か
- ③子どもの現在の経験に意味が付加され発展するとそれはどのような経験になるか

まず、①素材と子どもの経験との設定については、例えばわらべうたが素材の場合、「遊び」が挙げられている。その他、素材となる音楽が流れる行事に参加したことがある、普段の生活経験の中で耳にしたことがある等、子ども自身の経験と素材との接点が見出されると、素材との出会い部分や経験の発展の可能性が高くなるといえる。

次に②について、衛藤によると、従来教材とはまず学問・科学・芸術があって、そこから教科内容を選別し、授業での学習指導において具体化したものとされていたという。しかし、生成の原理からみると教材は「子どもの外にあらかじめ準備されたものではなく、子どもが素材と相互作用するなかで生成されるもの」となる。それは子どものこれまでの経験とつながりを持ち、その経験を新しくつくり替えていくことに作用するものとなるという。中でも②でいう経験への意味の付与とは認識といえ、教科内容の4側面を考慮する必要があるとされる。

生成の原理に基づく音楽科の教科内容とは、『音楽教育実践学事典』及び『教科内容学に基づく教員養成のための教科内容構成の開発』において、i 音楽の形式的側面(音色、リズム、反復等の音楽の諸要素とその組織化)、

ii 音楽の内容的側面（音楽の質やイメージ、曲想）、iii 音楽の文化的側面（風土・文化・歴史）、iv 音楽の技能的側面（表現の技能、鑑賞の技能「批評」）という4つの側面で捉えられている<sup>13)</sup>。例えば、小学校中学年の共通教材である唱歌《もみじ》を例に挙げてみる。例えば《もみじ》の前半で追いかけて合うような重なり方のところは赤や黄色の葉が次々に重なって落ちてくるような感じ等と知覚・感受する。この「追いかけて合うような重なり方」というのがi 音楽の形式的側面、「赤や黄色の葉が次々に重なって落ちてくるような感じ等」がii 音楽の内容的側面に当たる。その感じが出るようにタイミングを合わせて歌う、二声のバランスを取るよう息の量を調整して歌う等の技能を習得する。これがiv 音楽の技能的側面である。また、作詞者の眺めた峠からみえるもみじの美しさを歌ったといわれているといったことがiii 音楽の文化的側面であり、それを理解してまた歌唱表現に生かすというように、4側面は絡み合っただどもの認識をつくり出している。この教科内容の4側面がそのまま授業の指導内容になる。このことから、教材研究の視点②において子どもの経験に付与される意味とは教科内容の4側面に関わる認識と解釈できる。

最後に、③のように、子どもの経験に意味が付加されると経験が新しくつくり替えられる、つまり、経験が再構成されるといえる。ではいかに子どもの経験の再構成を実現するのか。その実現のために、経験の再構成を原理とした単元構成として「経験―分析―再経験―評価」<sup>14)</sup>の枠組みが挙げられる。小島による単元構成はJ.デューイのいう探究による直接経験における不確定状況から、反省的经验という確定状況への変容に基づいている<sup>15)</sup>。この生成の原理による単元構成における指導内容とは子どもの「『活動を連続させる軸としてはたらく』もの」<sup>16)</sup>とされ、この「軸としてはたらくもの」は音楽科の教科内容に基づいて「[共通事項]から何か1つを特定」<sup>17)</sup>することで導出できるといわれる。[共通事項]は音色、リズム、強弱、速度等であり、生成の原理からみるとi 音楽の形式的側面に当たる。そして、ii 音楽の内容的側面はiと対のもののため、ここでいわれる「子どもの活動の軸として働く指導内容」は、iに当たると解釈できる。つまり、子どもの活動を支え、経験の再構成を促進するためにはまず、i 音楽の形式的側面の一つを特定する必要があるといえる。

以上より、授業構成における教材研究の視点を、指導内容導出という観点からみると、i 素材はどんな4側面をもっているか、ii 素材から形式的側面としての指導内容を一つ特定することと解釈できる。

## 2. 生成の原理に基づく教材研究における指導内容の設定

ここでは生成の原理に基づいて指導内容を一つ特定し、設定している例として『三訂版小学校音楽科の学習指導―生成の原理による授業デザイン―』（小島律子監修、廣済堂あかつき、2018年）を取り上げる<sup>18)</sup>。

表1 『三訂版小学校音楽科の学習指導―生成の原理による授業デザイン―』にみる指導内容の設定

学 年	分 野	指導内容 <sup>19)</sup>	教 材	
小学校低学年	第2学年	歌唱	呼びかけとこたえ	かくれんぼ
	第1学年	歌唱	リズム（はねるリズムとはねないリズム）	かたつむり
	第2学年	器楽	音色（楽器の音色）	虫のこえ
	第1学年	音楽づくり	言葉の抑揚	売り声づくりの活動
	第2学年	鑑賞	反復と変化	卵のからのつけた雛の踊り（展覧会の絵より）
小学校中学年	第4学年	歌唱	旋律の動き	とんび
	第3学年	歌唱	音の重なり（オスティナート）	十五夜さんのもちつき
	第3学年	器楽	音色（リコーダーの音色と奏法）	たこたこあがれ
	第4学年	音楽づくり	リズムパターン	お囃子づくりの活動、徳島県民謡《阿波踊り》
	第3学年	鑑賞	3拍子	象（動物の謝肉祭より）
小学校高学年	第6学年	歌唱	強弱	つばさをください
	第6学年	歌唱	和音の響き	こげよマイケル
	第6学年	器楽	音階（日本の音階）	越天楽今様
	第5学年	音楽づくり	音階（日本の音階）	ふしづくりの活動、わらべうた《なべなべそこぬけ》
	第5学年	鑑賞	音色（オーケストラの音色）	行進曲（くるみ割り人形より）

同書では、i 音楽の形式的側面としての指導内容の設定について、「授業での活動を通して最低限何を学習させるのかを示すもの」、「教材としての楽曲（音楽づくりの場合は活動自体）を特徴付けている構成要素のうち、誰でも知覚できると考えられる構成要素を〔共通事項〕から一つ選び、設定するもの」とされている。指導内容設定の手続きは、教材の音楽的特徴、その音楽的特徴と風土・歴史・文化とのかかわり、音楽と遊びや踊りやドラマなどのかかわりという3点が読み取れる。音楽的特徴は音楽の形式的側面・内容的側面、音楽的特徴と風土・歴史・文化は文化的側面といえ、文化的側面が単独に存在するのではなく、形式的側面・内容的側面との関わりを考慮する必要があるといえる。加えて、ここでは他の媒体とのかかわりも挙げられている。

この3点を考慮しながら、対象学年を想定して教材から見出された指導内容が教材毎に一つ設定され、形式的側面が4側面の代表として示されている（表1）。

### 3. 先行研究にみる教材研究における指導内容導出の視点

#### (1) 鑑賞教材《チャールダッシュ》からの指導内容導出の視点

斉藤らは小学校における鑑賞授業のモデル開発を目的としている<sup>20)</sup>。

この研究では鑑賞教材《チャールダッシュ》の教材研究、実践、検証が行われている。その結果、指導内容として設定した「速度の変化」を知覚・感受し、それをもとに楽曲全体を鑑賞することで楽曲の捉え方の変化がみられたという。一方で、音楽の形式的側面の知覚・感受の方法論の開発、学年の発達段階に即した教材選択が今後の課題とされている。具体的な指導内容導出の手順は次のように示されている。《チャールダッシュ》（ヴィットーリオ・モンティ作曲）は哀愁をもって演奏される「遅い」部分と、華やかで激しい「速い」部分が連続する形式で、歴史的に辿ればイスラム世界、中近東諸民族等でも見られる形式である。この文化的背景をふまえ、この教材の音楽的な特徴は速度、旋律、調の変化と分析されている。ここでさらに中学年という子どもの発達が考慮され、指導内容は速度と設定されるに至っている。

このことから、《チャールダッシュ》からの指導内容導出の視点は、形式的側面・内容的側面の特徴（速度、旋律、調の変化）、形式的側面・内容的側面と文化的側面の関連、子どもの発達という3点と読み取ることができる。

#### (2) 郷土の音楽《こーじゃー馬ぐわ》《ていーちていーる》《谷茶前》からの指導内容導出の視点

小川は3つの沖縄の郷土の音楽を教材とした事例を通して、郷土の音楽から指導内容を導出する視点を明らかにしている<sup>21)</sup>。

この研究では、沖縄の郷土の音楽であるわらべうた《こーじゃー馬ぐわ》《ていーちていーる》や民謡《谷茶前》といった郷土の音楽から「後打ちリズム」という独特のリズムが指導内容として導出されている。子どもたちはその「後打ちリズム」を馬が跳ねるような遊びの動き、裏拍でかかとを上げるような踊りの足の動き等によって感じ取り、その感覚を振りどころに音楽の「後打ちリズム」を認識していったとされる。その拍感によって音楽をつくったり、聴いて味わったりして学習を展開していったという。この事例での子どもの姿から、その土地の人々が日々の暮らしの中で育んでいる「ことば」「動き」の感覚が郷土の音楽の形式的側面に反映されていることが明らかにされている。

このことから、《こーじゃー馬ぐわ》《ていーちていーる》《谷茶前》からの指導内容導出の視点は、形式的側面・内容的側面の特徴と「ことば」「うごき」の感覚との関連を考慮することと読み取ることができる。

### 4. 生成の原理に基づく教材研究における指導内容導出の視点

以上より、生成の原理に基づく教材研究における指導内容導出の視点、2点を以下のようにまとめる。

- 1) 生成の原理に基づく教科内容の4側面の関連を手がかりに形式的側面の特徴を見出すこと
- 2) 対象となる児童生徒の発達を考慮し、形式的側面を一つ特定すること

## Ⅲ 生成の原理に基づく教材研究の実際

ここでは、《威風堂々第1番》鑑賞授業の実践前の教材研究に関する実際の作業について、前章で見出した指導内容導出の視点から整理して示す。

## 1. 想定対象学年：小学第5学年

2. 教材：《威風堂々第1番》エルガー作曲（NHK名曲アルバムイギリス編）<sup>22)</sup>

## 3. 《威風堂々第1番》の教材研究

## (1) 生成の原理に基づく教科内容の4側面の関連から見出される形式的側面の特徴

## ①音楽の形式的側面とそこから感受される内容的側面（内容的側面は下線部）

まず、音楽の形式的側面の特徴は、主部（A）と中間部（B）という対照的な2つの主題が知覚される。この音源は一部カットされた短縮版となっており、「序奏-A-B-A-B-Coda」という構成が知覚される。序奏を経てAが始まり、次に *Largamente*（ラルガメンテ）と指示されたBが現れると、主に主題、強弱の変化として知覚される。その後、A全体が反復、さらにBがオルガンを伴い、テクスチュア、強弱、演奏記号、調性等を変化させて反復され、その構成が知覚しやすい。それから感じ取られる音楽の内容的側面はあくまで個人のもののため、筆者による一例を示すとすると、Aの主題は勇ましい、鼓舞するような感じ等、Bの主題は悠々、流れるような等と感受される。「序奏-A-B-A-B-Coda」という構成の中で鼓舞するようなAが始まり、Bへ移るとその悠々とした感じが際立って感受される。再びA全体が反復されると再び前進し始める感じ等と感受される。その後、再びBがオルガンを伴い、テクスチュア、強弱、演奏記号、調性等を変化させて反復され、悠々のみならず、  
歓喜、称える感じ、パレードの中を歩いている等と感受される。

以上より、この楽曲の音楽的な特徴は、A・Bという対照的な2つの主題、「序奏-A-B-A-B-Coda」におけるAの反復、AからBへの変化、Bの反復と変化、前後に序奏とCodaが付加された構成、テクスチュア、強弱、調性等である。なお、内容的側面は形式的側面と表裏一体のものとして捉え、ここでは記述を省略している。

## ②形式的側面・内容的側面と文化的側面との関連

文化的側面の理解は形式的側面の知覚、内容的側面の感受を支え、深める役割を果たす。

《威風堂々》は1901年イギリスの作曲家、エルガーによって作曲された演奏会用の軍隊行進曲である<sup>23)</sup>。交響的行進曲とも呼ばれる。イギリス国王エドワード7世が中間部の旋律を称えたことを受け、エルガーは翌年戴冠式を祝う《戴冠式頌歌》作品44の終楽章にこの旋律を用い、『希望と栄光の国』という歌詞をつけた<sup>24)</sup>。現在ではイギリスの国歌につぐ国民的な愛唱歌となっている<sup>25)</sup>。そして、行進曲の中間部はトリオと楽譜に記されている。トリオとはバロック時代の舞曲スケルツォやメヌエットの後にくる3声部（第2メヌエット）を指す<sup>26)</sup>。古典派以降は3声書法はすたれ、軽やかで優雅な旋律的な曲想をとるのが通例となり、ロマン派になると行進曲など、広く三部形式の中間部に用いられるようになったとされる。

以上より、優雅な旋律的な曲想をとる中間部を用いる行進曲の特徴をもつという文化的側面の理解が、A・Bという対照的な2つの主題、「序奏-A-B-A-B-Coda」におけるAの反復、AからBへの変化、Bの反復と変化、前後に序奏とCodaが付加された構成という形式的側面の知覚、内容的側面の感受を支えるものと解釈される。

## ③形式的側面・内容的側面と技能的側面との関連

鑑賞における技能的側面とは「批評」とされ、形式的側面、内容的側面、文化的側面を外面化する道具として機能する。①、②で述べてきたように、中間部が用いられる行進曲として作曲されたという文化的側面と、ABの主題、反復と変化という形式的側面・内容的側面の効果を理解し、楽曲全体から得られる価値を批評文にあらわす技能が働くことになる。

## (2) 対象となる児童の発達を考慮した形式的側面の特定

## ①子どもの学習経験

対象として想定したのはA市内B小学校第5学年である。これらの児童は4年生までに《ファランドール》《ノルウェー舞曲》を教材とした鑑賞において「反復と変化」を形式的側面の指導内容とした学習経験をもっている。《ファランドール》（ビゼー作曲）は南フランスの民謡から引用した2つの対照的な主題が反復しつつ、楽器、強弱、速度、テクスチュア等、様々な要素を変化させて現れる楽曲である<sup>27)</sup>。《ノルウェー舞曲》（グリーグ作曲）はノルウェーの民族舞曲にみられるような、力を抜いて緩慢に開始し、次第に活気を帯びて速い動きとなり、突然静まるという特徴を受け継ぎ、緩慢なAと活気のあるBによるABA形式をもつ楽曲といわれる<sup>28)</sup>。上記の学習経験による児童の発達をふまえると、これまでの楽曲とは異なる「序奏-A-B-A-B-Coda」におけるAの反復、AからBへの変化、Bの反復と変化を知覚（形式的側面）・感受（内容的側面）し、文化的側面の理解をふまえて批評文にあらわす（技能的側面）ことが可能であり、新たな経験の再構成につながると見込まれる。



5年生に味わいを深めさせる教材として適切であると考えたためである。

以上より、《威風堂々第1番》の指導内容を「序奏-A-B-A-B-Coda」におけるAの反復、AからBへの変化、Bの反復と変化の知覚（形式的側面）・感受（内容的側面）、文化的側面の理解をふまえて批評文にあらわす（技能的側面）と設定することとした。

#### 4. 模擬授業による指導内容設定の検証

前項の教材研究と並行して仮説生成模擬授業を実施し、「どのような指導内容の設定が可能か」という観点から検討を行った。日時は2022年5月31日（火）、京都教育大学にて、参加者は指導者役（実践予定者の大和氏）、小学校教員1名、大学教員3名（1名は筆者、1名はオンラインで参加）である。主に問題となったのは「歩く」活動の重要性、知覚・感受した内容に即した音楽用語の提示についてであった。

##### (1) 音楽に合わせて歩く活動に現れる指導内容

まず、冒頭A部分を聴いて感じたことを出し合うと、「にぎやか」「迫力がある」「歩きたくなる」等の意見が出される。参加者aが身体を動かして拍やリズムにのっている様子を捉え、指導者は歩いてみようと言い、A部分に合わせて輪になって歩くこととなる。おおまかに歩いているとだんだんノリが出てきたり、腕を振ったりしたくなる。「どんな感じか」問われると、「どんどん前に進みたくなる」「元気が出る」等の意見が出される。さらに実践者から続きがあると説明され、続きも歩いてみることにする。すると、突然歩きにくくなり、どう動いて良いかわからないといった違和感が感じられる。すると、参加者bが両手を横に広げて上下に振り、羽ばたくように動かし始める。他の参加者も揺れたり、参加者bの羽ばたきを真似したりしながら続けて歩く。実践者が一旦止め、参加者bの動きを全員で共有し、動きが変化したことを確認し、この曲にはA部分とB部分という2つの主題が出てくることを確認した。ここまでで、音楽に合わせて歩くことで、まずは大きく違う2種類の主題が現れることを実感しやすいことが共有された。

さらに指導者がまだ続きがあるので聴こうと言い、輪になってB部分の続きに合わせて歩くと、途中から再びノリがよく、腕を振りたくなるような箇所が出てくる。さらに動くともB部分が再び現れる。これらの動きの変化に即して楽曲の構成を確認していくこととした。ここまでで、音楽に合わせて歩くことで、AとBの現れ方を自然に経験でき、指導者がそれを意識的に取り上げることで構成がつかめることが共有された。

表5 模擬授業での感受の発言と動き

	A	B	A	B
感じ	どんどん前に進みたくなる、元気が出る感じ等	優雅、飛んでいるよう等	また前進する等	パレードの中を意気揚々と行進している感じ
動き	腕を振って歩く等	揺れる、両手を羽ばたくように動かしながら歩く等	腕を振って歩く等	両手を大きく羽ばたかせながら動く等

##### (2) 知覚・感受した内容に即した音楽用語の提示

用いた音源はNHK名曲アルバムのものであり、原曲からは最初のA（主部）のうちのabの反復が省略され、続くB（中間部）ではdの反復が省略されている。そのためバランスの上で複合三部形式がいくぶん不明瞭となり、ABABが交互に現れる構成になっているといえる。その場合、どのような音楽用語を提示し、子どもたち自身が使える言語とするのが適切かという点が問題となった。

学習指導要領において反復と変化とは、音楽の仕組み<sup>34)</sup>、音楽を構成する原理<sup>35)</sup>と説明される。音楽辞典では「反復」についてのみ記載がみられ、「楽曲の構成原理のもっとも重要な要素のひとつ」<sup>36)</sup>とされる。『生成を原理とする21世紀音楽カリキュラム』では、「反復は、楽曲の構成原理の最も基本的で重要な要素のひとつであり、ほとんどすべての楽曲形式は何らかの形で反復をもつ」「1.楽曲のある一部分を繰り返すものと、2.楽曲中の動機、旋律、リズムなどの一部の要素を繰り返すものがある」。変化とは「反復とは不可分であり、どの部分にどのように変化をつけるか、反復部分は同じか違うか、新しい部分は含まれていないか、などの理解が学習内容となってくる」と説明されている<sup>37)</sup>。これらの意味からすると、B部分が反復しつつ、変化している箇所が「反復と変化」に該当すると考えられる。今回は模擬授業での歩く活動によって大きく変化したと体感されたAからBへ

の移り変わりも、子どもにとって変化と捉えられるものと考え、Aの反復、AからBへの変化、Bの反復と変化（テクスチュア、強弱、楽器の音色等の変化）を指導内容とした<sup>38)</sup>。その際は名詞形で「反復と変化」と提示するのではなく、具体的に何が反復し、何が変化しているのかを確認していくこととした<sup>34)</sup>。

以上(1)(2)より、導入部分で音楽に合わせて歩く活動によって行進曲の文化的側面とも深く関わる対照的な2つの主題、およびその現れ方をつかませやすいこと、子どもの知覚・感受に即した音楽用語の提示についての十分な検討の必要性がみえてきた。

#### IV 考察

最後に音楽科の教材研究における指導内容導出の意義という観点から考察する。

今回、生成の原理に基づく音楽科の教材研究における指導内容導出の視点を文献および先行研究から整理したところ、次の2点が見出された。1) 生成の原理に基づく教科内容の4側面の関連を手がかりに形式的側面の特徴を見出すこと、2) 対象となる児童生徒の発達を考慮し、形式的側面を一つ特定することである。そして、小学校第5学年を想定した《威風堂々第1番》鑑賞の教材研究を、上記視点に沿って見直したところ、それぞれの実際の手続きが明らかになった。1) については4側面の関連を意識することで指導内容導出が明確になったといえる。形式的側面と内容的側面は表裏一体のものとして捉えることができる。文化的側面の理解は形式的側面の知覚、内容的側面の感受を支え、技能的側面はそれらを外面化する道具として機能すると考えられる。

2) については下位の視点として、①子どもの学習経験、②現代のイギリス人の受け止め方、③短縮バージョンと指導内容との関連について検討する必要性がみえた。①の学習経験の考慮とは、今回は指導内容を系統的に学習してきた経験に応じて、次なる指導内容の設定を定めることとなったことである。生成の原理に基づく教科内容からみると、児童の発達を教科内容に関する認識の形成とその発展とみることになる。これは、各学年における多様な教材研究での適切な指導内容導出につながると考えられる。②の現代のイギリス人の受け止め方については、実践者が教材研究を深める中で得た情報である。同じ現代のイギリスの人々がどのようにこの曲を受け止めているか、そのことも今回の「反復と変化」という指導内容導出のヒントとなった。このことは、楽曲が成立してきた背景としての文化的側面という枠組みを超えて、新たな指導内容導出の視点の可能性といえる。一つ一つの実践を通して、対象となる子どもの発達を想定して教材研究を重ねることでこういった視点が見出されることが見込まれる。③の短縮バージョンについては、魅力的な音楽の中で学校音楽教育での教材となり得るかを考える時、楽曲の長さや指導内容との関連が一つの重要な視点となると考えられる。それは児童の発達と楽曲の魅力という両面から検討する必要がある。今回の短縮バージョンの選択によって、児童が関心を向けやすく、音楽との継続的な相互作用を可能にしたと考えられる。

今回整理した視点を意識した教材研究によって、子ども自身が認識を形成するような指導内容の導出が可能になる。それは、まず初めに楽曲の特徴や魅力から始まるが、そのみならず、児童の発達や受け止め方を想定して行われるため、おのずと授業構成そのものも変えていく可能性をもつと考えられる。今後は、実践での子どもの姿から、今回見出した視点について検証することを課題としたい。

#### 注

- 1) 柴田義松「第2章教科書教材の教授学的研究」、日本教育方法学会編『日本の授業研究下巻—授業研究の方法と形態』学文社、2009年、pp. 30-32
- 2) 柴田義松(2001)「教材研究」日本カリキュラム学会『現代カリキュラム事典』ぎょうせい、p. 161
- 3) 今由佳里(2005)「地域の音楽学習のための教材開発—《撫養(むや)の子守唄》を事例として」『教育実践学論集』第6巻、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究所、pp. 79-90. 菅道子(2004)「生活科」における音楽の教材開発の可能性：歴史にみる音楽の合科・統合のカリキュラム編成の試み』『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』第14巻、pp. 169-177. 重藤暁・玉田和恵・山口敏和・小原裕二・松尾由美・八木徹(2022)「邦楽を全ての子どもに体験させる手段としてのICT可能性—三味線音楽のプログラミング教材開発に向けて—」『Informatio: 江戸川大学の情報教育と環境』第19巻、pp. 83-88.
- 4) 小笠原喜康「教材の概念」、日本教材学会編『教材事典—教材研究の理論と実践』東京堂出版、2013年、pp. 22-



- 5) 小川由美「音楽科の指導内容」, 日本学校音楽教育実践学会編『音楽教育実践学事典』音楽之友社, 2017年, p. 56
- 6) 岡本信一「音楽科の教材研究における『意味の分類学』の有効性」『兵庫教育大学研究紀要』第26巻, 2005年, pp. 119-124
- 7) 小野文子・廣畑まゆ美「音楽科の教材研究の課題～中山晋平の功績から検討する一考察～」『中国学園紀要』第14号, 2015年, p. 207-124. 富田英也「小学校音楽科における日本音楽の教材研究の一考察」『白鷗大学教育学部論集』第8号, 2014年, pp. 163-173
- 8) 斉藤百合子・小笠原真也・山口博明「新しい鑑賞授業のモデル開発—附属桃山小学校における授業実践を通して—」『教育実践研究紀要』第10号, 京都教育大学附属教育実践センター, 2010年, pp. 101-110
- 9) 小川由美「郷土の音楽から指導内容を導出する視点—沖縄のわらべうたや民謡を教材とした事例から—」『教科内容学研究』第1号, 日本教科内容学会紀要, 2015年, pp. 95-107
- 10) 西園芳信「生成の原理と音楽科」日本学校音楽教育実践学会編『音楽教育実践学事典』音楽之友社, 2017年, p. 20
- 11) 西園芳信「第1章カリキュラム構成を支える哲学」, 日本学校音楽教育実践学会編『生成を原理とする21世紀音楽カリキュラム—幼稚園から高等学校まで』東京書籍, 2006年, pp. 12-13
- 12) 衛藤晶子「授業構成における教材研究の視点」, 日本学校音楽教育実践学会編『音楽教育実践学事典』音楽之友社, 2017年, p. 177
- 13) 西園芳信「生成の原理と音楽科」, 日本学校音楽教育実践学会編『音楽教育実践学事典』音楽之友社, 2017年, p. 20  
中島卓郎「第Ⅱ部第3章音楽」, 日本教科内容学会編『教科内容学に基づく教員養成のための教科内容構成の開発』あいり出版, 2021年, p. 74
- 14) 小島律子「第4章経験の再構成としての授業展開2. 生成の原理に基づく単元構成」, 小島律子編著『音楽科授業の理論と実践—生成の原理による授業の展開—』あいり出版, 2015年, pp. 62-70
- 15) 杉浦美朗『デュイにおける探究としての学習』風間書房, 1984年, p. 181
- 16) 小島律子「第5章音楽科における授業デザインの現代的視点」, 小島律子編著『音楽科授業の理論と実践—生成の原理による授業の展開』あいり出版, 2015年, p. 79
- 17) 同上書, p. 79
- 18) 小島律子監修『三訂版小学校音楽科の学習指導—生成の原理による授業デザイン—』廣済堂あかつき, 2018年, pp. 54-55
- 19) これらの指導内容には全て「曲想」が付け加えられているが, 表1にはi 音楽の形式的側面のみ表に示している。同上書, pp. 54-55
- 20) 斉藤百合子・小笠原真也・山口博明「新しい鑑賞授業のモデル開発—附属桃山小学校における授業実践を通して—」『教育実践研究紀要』第10号, 京都教育大学附属教育実践センター, 2010年, pp. 101-110
- 21) 小川由美「郷土の音楽から指導内容を導出する視点—沖縄のわらべうたや民謡を教材とした事例から—」『教科内容学研究』第1号, 日本教科内容学会紀要, 2015年, pp. 95-107
- 22) DVD「NHK名曲アルバムイギリス編」NHKエンタープライズ, 2011年(東京フィルハーモニー交響楽団演奏, 円光寺雅彦指揮)
- 23) 村上泰裕「行進曲《威風堂々》第1番ニ長調/第4番ト長調 作品39 解説」『エルガー 行進曲〈威風堂々〉第1番・第4番』全音楽譜出版社, 2011年, p. 4
- 24) 同上書, p. 5
- 25) 音楽之友社編『最新名曲解説全集〈第5巻〉管弦楽曲2』音楽之友社, 1980年, p. 379
- 26) 下中邦彦・岸辺成雄ほか編「トリオ」『音楽大事典第4巻』平凡社, 1982年, p. 1664
- 27) 塚谷晃弘『ビゼー アルルの女 第一組曲 第二組曲』全音楽譜出版社, 1961年
- 28) 菅野浩和「グリーグの生涯と芸術」音楽之友社編『作曲家別曲解説ライブラリー—⑧北欧の巨匠』音楽之友社, 1994年, p. 33
- 29) CD『小学校生の音楽5』教育芸術社(ロイヤルフィルハーモニーオーケストラ演奏, ノーマン・デル・マール指揮)
- 30) 教科書教材およびNHK名曲アルバムの楽曲分析には徳島文理大学教授, 作曲家の松岡貴史先生のご助言を

いただいた。

- 31) 村上泰裕, 前掲書, 2011年, pp. 13-38
- 32) 短縮版の該当箇所を記載している。同上書, pp. 13-38
- 33) 同上書, pp. 4-5
- 34) 文部科学省『小学校学習指導要領解説音楽編—平成29年7月』東洋館出版, 2018年, p. 7
- 35) 文部科学省『中学校学習指導要領解説音楽編—平成29年7月』教育芸術社, 2018年, p. 26
- 36) 浅香淳編『標準音楽辞典トワ』音楽之友社, 1991年, p. 1494
- 37) 笹野恵理子(2006)「反復と変化」, 日本学校音楽教育実践学会編『生成を原理とする21世紀音楽カリキュラム』音楽之友社, pp. 123-124.
- 38) 「反復と変化」の解釈については『三訂版小学校音楽科の学習指導—生成の原理による授業デザイン—』を参照した。小島律子監修「5. 鑑賞 卵のからをつけたひなの踊り(展覧会の絵より)」, 前掲書, 2018年, pp. 72-75

**Discussion on Perspectives of Deriving Teaching Contents  
from the Study of Teaching Materials for Music  
- A case study of “Pomp and Circumstance March No.1” as  
teaching material -**

TETSUGUCHI Mariko and YAMATO Akira

The purpose of this study is to discuss perspectives of deriving teaching contents from the study of teaching materials for music using “Pomp and Circumstance March No.1” as teaching material.

Based on the literature and previous studies, we were able to categorize perspectives of the study of teaching materials and the derivation of teaching content based on the “concept of the generating music” into two categories, which are: 1)To identify the characteristics of the formal aspects using the relationships among the four aspects of the subject content based on the “concept of the generating music” as a clue, and 2)To identify one formal aspect in consideration of the developmental level of the target students.

Based on the above perspectives, we reexamined the actual cases where teaching materials were studied assuming music appreciation class using “Pomp and Circumstance March No.1” as teaching material, and have derived the conclusion that it is possible to derive teaching contents that allow children to form their own perceptions. Further, we also found sub-perspectives when considering children’s development in the study of teaching materials and the possibility to elaborate procedures for the study of teaching material.